

怖れに負けず、やりたいことを

麻酔科医 草谷 洋光氏 (高校29期)

私は麻酔の専門医です。大学病院で手術室の麻酔・集中治療・救急・ペインクリニックなどをした後、南極観測隊員として昭和基地で越冬。帰国後は国境なき医師団に参加、スリランカ、シエラレオネ、パキスタン、インドネシア、シリアで活動し、現在はフリーランスの麻酔科医をしています。ここでは高校時代から今までの経過を書きます。



立高では剣道部に入り合唱祭実行委員をしました。演劇コンクール・応援など2年の合唱祭まで積極的に行事へ参加しましたが、その後は一転、毎日ボーっと過ごすうちに卒業を迎えてしまいました。そのため受験では二浪しました。大学では毎日フルに授業が有り、夕方からは部活、夜は先輩あるいは同級生と飲み歩く日々。勉強は毎学期の試験前、卒業試験・国家試験は直前の半年間、体力任せに勉強し何とか医者になりました。

卒業後は、目の前の死にそうな人に何も出来ないのは嫌だと思い、救急を専門とする麻酔科に入りました。大学病院や出張病院でひたすら麻酔をかけ、他科の研修、研究、学会発表、論文執筆などをしました。当直続きの滅茶苦茶ブラックな環境でしたが、結局自分がやった分だけ実力になったと思います。

10年を過ぎ生活は安定しましたが、たった一度の人生同じ事を続けるだけではつまらないと思い30代後半に大学病院を辞めることにしました。それまでに築いた肩書や立場を捨て慣れた場所から離れるのはとても怖かったですが、好奇心の方が勝ちました。



昭和基地での昼作業風景

仕事を辞めることを決断すると、南極に行く医者がないので行って欲しいという話が舞込み、越冬隊員になりました。南極では日常生活も全て自分達で行うため、観測とは別に、事務・電機・機械・建築・調理・通信・ゴミ処理などあらゆる分野のスペシャリストがいました。何事においても学歴や肩書きでは無く本当の実力が大切だと肌で感じました。



南極海氷上でアザラシに麻酔



スリランカ・ジャフナの病院手術室

南極から帰った後、知らない世界への好奇心で国境なき医師団に参加しました。麻酔が専門だったので紛争地の手術室へ派遣されました。当時内戦中のスリランカそして停戦直後のアフリカ・シエラレオネに行きました。そんな危ない所にと云われますが、危険はゼロではないものの担当者の努力で安全はかなり保たれています。また何故行くのか聴かれますが、現地での我々のニーズは高くそこでの活動は誇りと喜びに満ちています。そのため参加した我々自身が幸せになれるのです。

海外ボランティアでもフリーランスでも私のやっているのは同じで、目の前の患者さんにベストの麻酔をすること、それは世の中の為に私の出来ることなのです。今迄を振り返り、一般常識に囚われず、怖れに負けず、自分がやりたい・やるべきだと感じることをするのが、悔いの残らない人生に繋がるのだと思います。どうかハッピーな人生を！



シエラレオネ・フリータウン郊外の村にて